

パネルディスカッション「肝移植の位置付」

司会：江口 晋 先生（長崎大学大学院移植・消化器外科）

菅原 寧彦 先生（熊本大学小児外科・移植外科）

【司会の言葉】

わが国において、肝細胞癌に対する生体肝移植が開始されてから約 20 年が経過した。年間 100~150 例の肝癌症例に対し、生体肝移植が行われている。この間、移植手術技術や術後管理の進歩、さらには非代償性肝硬変に伴うという条件付きで保険適応となったことなど医学的・社会的に数多くの変遷を経て現在にいたっている。この肝細胞癌に対する肝移植の予後を決定する最も重要な因子は術死、入院死と肝細胞癌の再発であり、これらを減少させるためにさまざまな努力がはらわれている。議論すべき問題として、至適な腫瘍条件のほか、down-staging や肝移植前治療の適応、ウイルス肝炎のマネージメント、術後、免疫抑制剤の選択、再発症例のモニター・治療などがあげられる。本パネルディスカッションでは、施設での肝細胞癌に対する生体肝移植の治療成績を発表していただき、以上のような問題点を討論したい。